審査の結果の要旨

マハナズ　シャラキプール
(Mahnaz Shahrakipour)

本研究は，イランのホラーサーンの州でケース・コントロール研究を実施し，当該地区の乳がん発症頻度を把握し，過去の発症率と比較することで発症パターンの変化を明らかにした．また乳がん発症と人口統計的要因，ホルモン及び生殖要因，社会経済的要因との関連を明らかにして，モデルの当てはまりを検討した研究であり，下記の結果を得ている．

1．　イランに追いて 1,166 人のケース（乳がん発症者）と 2,506 のコントロールの研究対象者に関する年齢，身長，体重，乳癌の家族歴，家族内結婚歴，喫煙歴，初潮開始年齢，結婚歴，最初に臨月を経験した年齢，妊娠回数，母乳育児の有無，閉経年齢，社会経済的状況に関するデータを得た．

2．　乳癌の家族歴，家族内結婚歴，喫煙歴のある女性で乳癌のリスクが有意に増加することがわかった．また，高い閉経年齢（45 歳を超える），高い BMI（28 を超える），高い初回妊娠年齢（最初の臨月時に 25 歳を超える）が乳がん発症のリスクであることも示された．

3．　さまざまな研究で異なる結果が報告されている母乳育児が乳がんの危険を減少させるという仮説は，本研究では示されなかった．

4．　閉経前後で対象者をサブグループ化して解析を実施した結果，閉経後に乳がんリスクが増大することと，閉経前後では乳がんリスク因子が異なることが示唆された．具体的には閉経後の女性では 45 歳を超える高い閉経年齢が有意な乳がんリスクであることが示された．また，閉経前の女性では社会経済状態がある程度リスク因子となることが示された．

5．　閉経状態にかかわらず，社会経済状態が低い対象だけに限定したサブグループ解析を実施した場合，最初の妊娠年齢が高い（最初の臨月時に 25 歳を超える）と乳がんリスクが 3 倍になり，閉経状態が全集団での結果より高いリスクとしてなっていることが示された．